



同志社人物誌 (26)

中島重

嶋田啓一郎

同志社アカデミズム

宇宙の客観的真理には統一性がなければならぬ。しかるに幾多の要因の交錯するそれぞれの特殊状況から生ずる現実の思想的相対性多様性は、激しい対立・論争を通して、相互理解より客観的統一性への過程を急ぐ。そこにもろもろの大学の個性のうまれる場が存す

る。

同志社大学は、同志社学風に固有の個性をもつことによって、学界に独自の貢献をしなければならぬ。それはいわゆる「同志社ナシヨナリズム」というような、閉鎖的で独善的な学園の別天地を意味するのではなく、新島襄先生の遺言の「同志社教育の目的は其の神学政治文学等に従事するに係らず皆精神活力

あり真誠の自由を愛し以て邦家に尽す可き人物を養成するを務む可き事。」という一条の含蓄しているように、この世の権力に圧倒されることのない不拔不羈の自由精神をもって宇宙の真理を探究する「同志社アカデミズム」の確立をめざすものでなければならぬ。聖書は「真理は汝に自由を得さすべし」と教えているが、同志社の自由精神は真理の探究によって保証されるものであって、客観的真理への絶対的謙虚無くして、自由精神はまことの存立の足場をもち得ない。

それは単なるアカデミズムではない。特に「同志社アカデミズム」と呼ぶゆえんのもは、基督教主義大学の本質として、ここでは諸学部、諸学科においてそれぞれ特定の個別科学が探究する真理が、絶対者の手のうちにある世界存在の全体との対決のなかで把握せられるからである。生存の確立や有用な生産に奉仕する個別科学の専門的研究は、実在を特殊的・部分的側面に限定することによって成立するが、それらの諸個別科学自体からは宇宙全体との対話、事物の統一の全体との対決への志向はうまれぬ。哲学的思惟における全実在の考察こそ、個別科学の確保し得な

い全体に対する開放性をうみだす媒体となるが、各専門学科の測り知れぬほど多様な知識の凡てを一つに綜合する「諸科学の協働」のために、この哲学的思惟を推進しようとする不退転の熱意は、基督教主義大学の譲るべからざる本質に属している。アカデミズムが全実在との関係を見失って、アトム化した知識孤立化した専門科学の自己満足をもって「自分の穴のなかに」落ち込んだとき、大学は今次の世界大戦において体験したような悲劇的な無力感に追いこまれて行ったのではなかったか。

われらは、同志社アカデミズムの一つの典型を、かつて同志社大学に職を奉じられた中島重先生の思想体系に求めることができるであろう。歴史はつねに個人の営みを忘却の彼方に押しやろうとするけれども、激動する社会の変遷のなかに裊として、信仰者として社会思想の分野に独特のフロンティアを開拓しようとした中島先生の人格と思想の迫力はその教えを受けた人々の胸底に、いまま鮮かな印象を刻み込んでいたのである。

中島重先生の思想的背景

同志社大学で憲法学や社会哲学を講義された中島先生の思想的背景には、大正リベリズムの伝統が脈打ち、日本資本主義の独占化の進行する昭和初年において、全体主義・国家主義・軍国主義に対抗して、民主主義・社会主義・自由主義の立場に拠って、独自の国家論を形成した。

上杉慎吉、寛克彦、入江貫一らが穂積八束の「家制立憲國家」の伝統を守る国粹憲法擁護思想をもって、ファシズム、君権、軍閥、官僚主義を鼓吹しつつあるとき、吉野作造は「民主主義」の良心的リベリズムをもって、新渡戸稲造、森戸辰男、大山郁夫、佐々木惣一、浮田和民など、大正デモクラシーの思想家たちの先頭に立った。その思想の根底にあるものは、社会本位の原理であり、「社会主義そのものを包括し、近代政治の全過程にわたり是を一貫する根本の主要原則だと考うる方が妥当の見解である。」(吉野作造)とあるように一般原理として社会主義を認めるが、その社会主義は議會主義的デモクラシーと固く結ばれていた。それは反動的な「国体明徴運動」の独裁的全体主義に鋭く対立するとともに、ロシア・マルクス主義のボルシェビズム的展

開に対しても批判のまなごを向け、自由主義の擁護に意欲的であった。この社会民主主義的系譜を無視しては、中島理論の真髓は的確に理解されない。

しかし中島理論が大正リベリズムの伝統を超える独特の風貌を与えたものは、キリスト教信仰の強い影響であった。その東大時代本郷教会において洗礼を受け豊かな人格的感化を与えた海老名弾正牧師は、同志社総長となるや、愛弟子中島重を同志社に迎えて、この学園の特色とする自由潤達な学風のもとで存分にその素質を伸展する機会を与えた。昭和の初めにおいて、すでに同志社にも右翼思想の進出が新旧対立の暗い影を投げかけ、私を知る当時の学内の空気は必ずしも明るさに満ちたものとは言えなかったけれども、今日のマンモス化とともに、いささか無性格化の生ぬるさを感じさせる学園光景に較べて、権力に抗する自由の学府、また基督教のインタナショナルリズムの気風の溢れるその頃の同志社には、さわやかな活気が感じられた。

この自由の学園で、信仰の炬火を高く掲げる二人の先達に逢って、この若きキリスト者はキリストのために激しく戦いつつわ者へと鍛

えられた。その一人は賀川豊彦、いま一人は堀貞一。『社会的基督教概論』（昭和三年）は中島先生の思想的渴望がこの二人の異色ある人物によって、いかに決定的な影響を受けたかを包まず告白している。堀貞一先生は、昭和二年一月ハワイにおいて靈感に導かれ、同志社に來られて一大リバイバルを起されたのであるが、中島先生はそのリバイバルの中から実存的信仰の偉大な活力を学び、確かな進路を見出されたのである。

賀川豊彦先生は、中島先生と同年齢の人。しかしその信仰の熱烈、思想の熟達、実践の伸展において、基督教界に早くも確固たる地位を築く予言者の人物であった。幾たびか同志社伝道に訪れられた賀川先生の人格的迫力と神学思想、しかしてそれから流れ出る社会的思惟は、中島先生の在來の生活と思索に触れ合うものをもつばかりでなく、思想的遍歴に伴う混沌に重要な解決の鍵を与えるものとなった。同志社に「雲の社会」をつくり、さらに「労働者ミッション」を組織されたのは「私は賀川先生こそ、私どもの行き悩んでいる絶壁を飛び超えて、勇敢に進んでいるその人だ」ということに気づいたのであります。

（概論「四頁」）という中島先生の精神革命の表現であった。

岩倉土地問題にからむ同志社本部との意見の阻隔は、純情一徹の先生をして袂を分つて関西学院に去らしめる結果となったが、先生の魂のふるさは、つねに同志社であり、同志社を離れた先生は陸に上つた河童のごとくに忙しげであった。結核は久しくその肉体を蝕み、肉体にこの刺をもつ人は、いかなるときも人生の純粹性を求めて、内面に激しい闘いをたたかひ続ける。今次大戦の直後、同志社は再び先生に教授として職場を提供し、先生は嗚咽してその友愛を感謝されたが、死への病は、再び先生を同志社の教壇に立つことを許さなかつた。その愛弟子竹内愛二先生とともに、臨終近い中島先生の病床を訪れたとき、私たちの手を握って「私の屍を超えて進め」と言われたが、それ以来、私はこの言葉の意味をいままも反響し続けているのである。容貌衆にすぐれて端麗な先生の死顔は、物事の積極面を求めて先へ先へと進むこの人の精髓を物語るかのように明るかつた。

中島重先生と賀川神学

も、またギルド・ソシアリズムと協同組合論に出発する社会的実践理論においても、互いに他の足らざるを補つて、一つの完成した思想体系を構成する双生児のごとき立場におかれていることは、まことに驚異と云うほかはない。

中島先生は、わが国におけるスペンサー研究の第一人者として、名著『スペンサー』を公刊せられ、社会を生物有機体の発展との類推において論じたスペンサーを省みつつ、社会結合本位思想と進化論とを融合せしめて、『発展する全体』（昭和十四年）の思想に到達せられた。メーンが「身分より契約へ」、テニースが「利益社会と共同社会の交替過程」として、社会の変化を単に社会結合の形式の変遷において考察しようとしているのに対して、社会哲学者としての中島先生は、社会そのものがその範囲および内容において結合を增大し、連帯を増進する進化論にいわゆる「定向進化」（orthogenetic evolution）の過程にあるものと解し、社会化（socialization）の統合化（integration）の拡大・高度化をもつて社会発展の指標と観ようとする。それは賀川先生が若き日よりの構想を練り上げて、実に

十七年間の執筆をもつて七十歳の夏出版された『宇宙の目的』の内容と相い補つて、歴史的發展の秘義を語るものといひ得るのである。中島先生は、病い癒えなば「社会發展の理論」を公にして、自分のライフ・ワークとしたいと口癖に言われていたが、ついにその機会は来なかつた。

社会的基督教の指導者として

子供の時から日曜学校で育てられ、二十三歳で洗礼を受けられた中島先生は、永く培われたキリスト教信仰における愛の共同体思想を、この發展論的社會哲学をもつて武装され活ける宗教とは、先生にとって宇宙万有の統一者にして包括者としての神との合一により自我と社会との乖離、自然界と自我との矛盾を克服する社会化機能を果たすものと考えられた。宗教をこのように社会的・機能的にみる立場から、いま個人主義的資本主義社会より、社会的結合・連帯の深化拡大する社会主義社会への發展の必然的なこの歴史の一大転換期に當つて、キリスト教がより一層高度の意識社会化を実現すべき歴史の課題を遂行し得るためには、プロテスタンティズムはその

私は過ぐる年、明治学院大学の「賀川豊彦記念講座」に十二回にわたる連続講演の機会を与えられ、賀川豊彦全集を改めて精読する時をもつたのであるが、中島先生の思想体系は賀川先生のそれとまさに「あざなえる縄」のごとくに密接な関係に結ばれていることを知つて、その友愛あるいは師弟の愛の深さに感嘆の念をさえ覚えるのであった。

もちろん、中島先生は憲法学者、社会学者として、学者独特の用意をもつて、精細にその社会結合本位思想を秩序付け、社会的現実のなかに明証し得るさまざまの事例をもつて、發展論的社會哲学の確かさを論述されるユニークな業績において、賀川先生とは別箇の境地を歩んだ人である。またわが国における「社会的基督教」の中心的指導者として、神学者ならぬ立場の身軽さから、意気揚々として旧教派の神学的伝統を論評し、一般教会に挑戦する「第二の宗教改革」論をもつて、当代の神学者と激突する気概において、賀川先生にみられぬ独自性を発揮した人である。しかしその獨創性にもかかわらず、その思想の全体構造は、その社会發展論においても、また贖罪愛にもとずく協同体思想において

個人主義的傾向を止揚して、神における共同社会の完成を目指す社会結合本位的「社会的基督教」へと、第二の宗教改革を敢行しなければならぬとする熱烈な主張が生まれ、キリスト者の社会主義運動への献身は、社会的基督教の本質より求めて止み難いものとされたのである。

社会的実践の学問的研究に心惹かれる私にとって、賀川、中島両先生の人格と思想は、まなこを閉ざして通り過ぎることのできない関心の事柄である。しかし聖書の信仰の奥儀を凝視する者の立場から言えば、人間の原罪性への問い方が、賀川神学の場合ですら、自由神学に共通の欠陥として不当に樂觀的であり、宗教的否定の契機が稀薄であるという非難は免るべくもない。キリスト者が現代の社会科学の領域に深く分け入ろうとするとき、社会科学に本質的な物の問い方として、運命的或いは不可避的に、この世の内側での内在主義的な解決方法に導かれざるを得ないため、いつしか人間理解が聖書に固有な罪觀の喪失に誘ひ込まれ、人本主義的偏向の危機にさらされる恐れのあることは、中島先生の場合にもいえることである。

『発展する全体』のなかで、人間の可能性の限界を強調するカール・バルトの弁証法的神学の終末論をもって「暴論」であると批評（同書二四八頁）されたが、「社会と万有とが神に帰入し、神の国が完全に実現されれば、そこには神の国はもはや存在せず、存在するものは神のみとなる。」（『社会的基督教の本質』一〇四頁）というような汎神論的理解のもとでは、神と人との永遠の質的相違は消滅し、聖書の真理はその根本を危くせられる。そこに社会的基督教の限界があった。

ヘーゲルは『世界史の哲学』のなかでこう言った。『各個人はその国民と時代の子である。何人もその後には止まらず、また況んやその前に進むことができない。』中島先生も「よせんその『時代の子』であった。しかし先生は学問と実践に身を張って、精進一路の人生を戦い抜いた人である。思想家とは、まことの死場所を求めゆく人の姿でなければならぬ。同志社は、このような学究者に支えられてこそ、とこしえにその生命を發揮することができるのである。

（文学部教授・社会保障論）

扉の画の筆者、三浦鉄造氏は慶応二年、山形県酒田の士族の家に生まれた。酒田那役所に勤めているとき宣教師モール博士を知り、そのすすめで同志社に入学した。

三浦鉄造氏のこと

彼が在学したのは明治二十四年から二十七年までであったが、当時、同志社の学生には山室軍平、宮川一男、津下紋太郎、村井貞之助、牧野虎次らがひしめきあい、キリスト教精神が学園にみちみちていたという。彼はとくに山室軍平の「説教や講演だけでは救われない人々が多くある。人はパンだけで生きるものではないが、またパンがなければ生きてゆけるものでもない」という熱弁に感動しどちらかといえば社会事業への関心を深めていった。

卒業後、一時ハワイに渡ったが、間もなく帰国、仙台で伝道を始めた。デビス先生や山室軍平を招いて講演会を開いたのもこの頃のことである。また東北の農村がウンカにより大きな被害をうけ、離村、放浪者が激増した際、自宅に迷い込んできた浮浪児を養ったり、日露戦争の

戦利品を手に入れてパンを作り、貧民に配ったり、寄付を集めて貧民に与えたりしたという。それらに対する宮城県知事の感謝状が嗣子・重雄氏（松本市在住）のもとに幾通か残されている。

その後、郷里の酒田に帰り、酒田と鶴岡を中心として農村伝道に献身した。とくに仏教の強い酒田では郵便局長を説得し、出勤前の郵便局を借りて朝の礼拝をしたり、貧民の救済に努力し、いつしか「街の聖者」と呼ばれるようになっていった。

彼の活動はしばしば新聞紙上でも紹介され、昭和八年、過労がもとで永眠（六十八歳）したときも、東京日日新聞の酒田版には写真入りで「酒田の聖者三浦氏逝く」の見出しで追悼記事が載せられている。

彼は在学中、郷里の酒田と同志社を往復する途次、各地で風景をスケッチしているが、明治時代の学生が一般によく旅行していることや、当時の風俗がうかがえて面白い。

三浦氏の業績については同志社ではほとんど知られておらず、今後、調査、研究する必要がある。